

子どものころの思い出



秋祭りといえば思い出す。おふくろの作った酒まんじゅうをできあがるとすぐに、姉たちと食べておいしかったこと。昭和35年ごろ私が5歳だったころのこと。近所の人と姉さんと左手にまんじゅう、右手におもちゃのピストルを握る私の3人で撮った写真は今でも思い出す。小学生になると東秋留小学校ではお祭りにより午前中で家に帰ることができた。子ども神輿は4年生からで担げなかった。大人神輿を担ぐ人はお化粧し怖かったものだ。山車を曳き神社下から町内を神輿と巡行する。最初に本通り(現在の北宿通り)に入り御仮屋で休憩したあと東側に下り、仲宿から下宿へと巡行していく。団地前で折り返して本宿通りから神社へ戻る。屋台が約300軒並び、人、人、人で通るのに大変だった。境内の舞台では演芸がはじまり、鳥居の前では神輿が上がる準備をし、階段を上がる途上祭りの最高の場面で大拍手で盛り上がる。神輿が拝殿の中に納まると、二宮歌舞伎(現在は秋川歌舞伎)がはじまる。二宮には古谷一座と栗澤一座が一年ごとに歌舞伎をしていた。父は二宮囃子連で笛を吹いていた。今でもお祭りが近づくと胸がわくわくする子どものころの思い出だ。

家は農家で庭先には牛小屋、豚小屋、鶏小屋と庭狭しとにぎやかであった。父は農業だけでは食べて行けず、卵を産まなくなった鶏を引き取る鶏の仲買人をして生計を立てた。東秋留地区から多西地区の一部まで自転車で荷台に大きな鶏かごを取り付けて回収してきた。当時はまだ自動車が少ない時代で、大変な仕事をして家族を養っていた。

そのかたわらお嫁さん探しの世話役を頼まれ、数組をまとめて仲人役までした。そんな父と母は仲が良くけんかをしているところを見たことがなかった。姉たちや私にも手を上げたこともなく幸福な家庭だった。父が残した畑を妻と二人で大切に守り両親、姉たちに感謝して頑張っている。



文：小澤 重夫さん (東秋留地区)

表紙のことば

ご主人の徳次さんは季節ごとの野菜作りに精を出し、ネギやトウモロコシ、のらぼう菜、タマネギなどを栽培しています。時間があれば畑へ足を運び、ご近所でも「きれいな畑」と評判です。趣味のお囃子では太鼓や笛を吹き、老人会の仲間と地域の保育園で教えています。グラウンドゴルフは週2回、最近始めた奥様と一緒に参加しています。

邦子さんは日本舞踊を習っていて、あきる野市高齢者クラブ連合会の代表の一人として、都の芸能大会に出場し、優勝した経験もあります。今年も出場を予定しています。お花が好きでガーデニングや季節の植物を描いた絵手紙、パッチワークなど多趣味で地域の仲間と楽しい日々を過ごしています。長男の章弘さんはシステム関係の仕事に携わり、競馬や車での旅行が好きです。計画を立てて家族を乗せて北海道や金沢へ旅行に行ったり、一人旅をしたり楽しんでいきます。次男の淳さんは機械加工の仕事に励んでいます。プロレスが好きでお正月や八王子市で試合があるときは観に行くそうです。

「家族が元気で、普段通り過ごせることが一番です」と話す徳次さん。明るい邦子さんを中心に家族それぞれが趣味や仕事を楽しみながら穏やかな日々を過ごしています。



山下さんご一家 (五日市地区)

左から▶
やました あきひろ (長男) 山下 章弘さん、
くに こ (妻) 邦子さん
とくじ (ご本人) 徳次さん、
じゅん (次男) 淳さん